

## ジョージア (グルジア) 便り その32

## 『ジョージアの正月』

文 高野陽年 text by Yonen Takano



トビリシのクリスマスイルミネーション。

ゴリゴリと胡桃をする音やほうれん草を細かく刻む音、オーブンの中で豚の背脂が弾ける音が絶え間なくキッチンから聞こえてくる。普段はまったく台所に入らないジョージアの男性も何かしら役割を与えられ、慣れない手つきで野菜の皮などを剥いている。年末31日の台所は世界共通でせわしないのだろう。

ジョージアの正月料理といえば七面鳥を胡桃のペーストで煮込んだサツイヴィや子豚の丸焼き、ほうれん草のペーストなどが代表的なのだが、その作量は半端ではない。何しろジョージアの正月はとにかく長いのだ。

新年をシャンパンと猛烈な手持ち花火で迎え、1週間は余韻に浸り浮かれていると7日には正教会のクリスマスが、14日には旧正月が訪れる。そして幾日か働くし洗礼父を祝

う祝日がすぐにやってくる。1月の半分以上は浮ついた雰囲気は街を覆い、クリスマスイルミネーションも1月終わりまで街を彩っているため海外からの観光客は嬉しさと同時に驚きを隠せないでいる。

長い正月の間、親戚や友人は頻繁に互いの家を訪れるのだが、普段から客人に手厚いジョージア人は正月ともなるとさらに客を大切にす。特に新年最初の客人はメクレと呼ばれて、良いメクレが家に訪れると一年間の幸運が約束されると信じられているのだ。幸運をもたらすメクレだと定評がある人にはオフアアが絶えず、朝から何件も家々をまわり、正月から疲れた顔をしている。

ともあれメクレでなくとも主人は豪勢な料理を振る舞い、一年間の健康と幸福を彼らは心から願ってくれる。次から次へと来る客人とともにグラスを持ち、ジョージア流に毎度毎度一言二言そえて乾杯する。僕らが秋に仕込んだワインも飲み頃を迎え、来たる正月に備えてあるが、すぐに無くなってし

まいそうだ。

しかしバレエダンサーにとつて世間一般の正月感覚は当てはまらない。

僕たちは新年からクリスマスまでの連休が一年でも特別忙しい。連日くるみ割り人形の公演があり、大晦日と元旦くらいがダンサーの冬季休暇である。いくらカウントダウンで大騒ぎしてフラフラでいても毎日のトレーニングは欠かせない。

連日遅くまで騒がしい夜とは対照的に静まり返る早朝の街を稽古に向かう足取りはなんだか寂しく虚しいが、一般人ではなく舞台人であるのだという特別な思いと誇りを持って冷たい風を切つて劇場へ急ぐのであった。

## Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

